

- 福島県相馬地方のトルコギキョウは、飯舘村や南相馬市沿岸部を中心に、県内有数の産地が形成されていたが、**平成23年3月の東日本大震災により栽培戸数及び面積が激減（面積：約95%減）**。
- **南相馬市内陸部を中心に産地復活に向けた新しい動き**があったが、産地の回復には、**より多くの新規栽培者の確保と技術の向上及び経営の安定化が必要**であったことから定期的な巡回・指導会、部会設立による産地の活性化等を図った。
- その結果、**平成27年には栽培者数、面積、出荷本数で震災直後の約3倍に増加**。

具体的な成果

- 1 栽培戸数・面積・出荷本数の増加
南相馬市中心に著実に増加（各約3倍）
 平成23年：6戸 → 平成27年：**19戸**

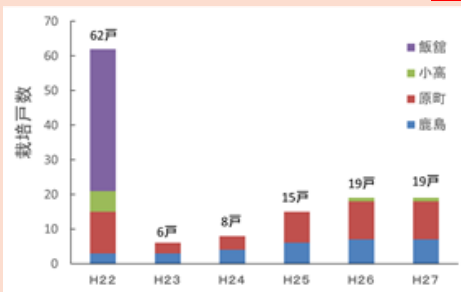


図1 栽培戸数の推移

平成23年：30a・30千本
 → 平成27年：**97a・87千本**

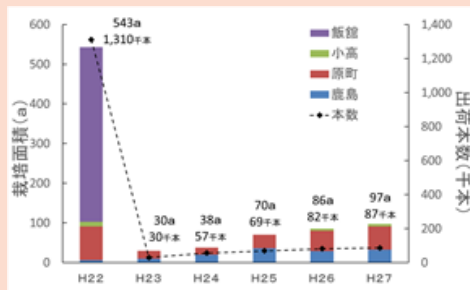


図2 栽培面積・出荷量の推移

- 2 平成27年5月に生産者19戸からなる**JAそうまトルコギキョウ生産部会が設立**
 民間支援による**「咲かそうそうま。トルコギキョウ魅力アッププロジェクト」**の立ち上げ

- 3 トルコギキョウとカンパニュラ周年栽培体系は、**平成25年の実証1戸から平成27年には5戸に増加**

普及指導員の活動

■ 平成25年～

- 1 新規栽培者の確保

水稻育苗ハウスの有効活用及び食用作物から**花きへ経営転換を検討している生産者を抽出し、トルコギキョウ作付け推進のチラシを配布**



- 2 栽培技術の習熟支援

生産者の技術の高位平準化を図るため、個別巡回と定期的な栽培指導会を実施。

相馬地方における従来からの生産者を招き**トルコギキョウ振興セミナーを開催**。

- 3 部会設立の誘導

生産者とJAに組織活動の必要性を提案し、**生産部会の設立を誘導**。

視察研修等の組織活動展開のため、**民間支援の活用も誘導**

- 4 花き周年栽培の取組

県農業総合センターと連携し、トルコギキョウとカンパニュラを組み合わせた周年栽培体系の導入を検討。



普及指導員だからできたこと

震災の影響が強く残る中、**地域の動きを適切にとらえて、率先してJA、生産者、県研究機関と連携を図**ることで、着実な産地回復につながられた。

福島県

トルコギキョウ産地復活に向けての取り組み

活動期間：平成25年度～継続中

1. 取組の背景

福島県相馬地方のトルコギキョウは、飯館村や南相馬市沿岸部を中心として、平成22年度は作付面積543a、出荷量131万本（旧JAそうま実績）であり、県内有数の産地が形成されていた。しかし、平成23年3月の東日本大震災の津波被害と原子力災害により、主産地であった飯館村の全村避難による栽培休止等の影響を受けて、産地全体で栽培戸数や作付面積が激減した（作付面積30a、出荷量30千本：旧JAそうま実績）。そのような中、収益性も高く、風評も少ない花き栽培の関心も高まり、南相馬市内陸部を中心に産地復活に向け新たに栽培を始める動きがみられたが、これらの地域はかつての産地を形成した場所ではなく、また、栽培を志向する農家のほとんどが経験の浅い生産者であった。

そこで、福島県相双農林事務所農業振興普及部（以下普及部という。）として、トルコギキョウの生産基盤の回復と産地復活に向けて、新規栽培者の確保、経験の浅い生産者等に対する技術の高位平準化、経営の安定化の支援等について取り組むこととした。

2. 活動内容（詳細）

（1）新規栽培者の確保

トルコギキョウの作付推進チラシを作成するとともに、新規栽培者の掘り起しのために、JAと連携し、水稻育苗用ハウスの有効活用や食用作物から花きへ経営転換を検討している生産者を抽出し、新規導入を推進した。また、新たに栽培を志向する生産者へは、重点的に巡回し技術支援を行った。

（2）栽培技術の習熟支援

新規栽培者や経験の浅い生産者が多く、技術のばらつきが大きかったため、普及部とJAによる個別巡回で技術的な支援を行うとともに、定期的な栽培指導会を開催し、トルコギキョウ栽培技術の高位平準化を図った。また、平成25年度には普及部によるトルコギキョウ振興セミナーを開催し、避難先で営農を再開した飯館村の生産者を招いた講演を通して技術伝承を進めた。



トルコギキョウの栽培指導会

（3）部会設立の誘導

トルコギキョウの産地復活を進めるため、普及部から生産者とJAに組織活動の必要性を提案し、トルコギキョウ生産部会の設立を働きかけた。この際、産地ブランド育成のための視察研修や市場訪問等の組織活動を展

開するため、民間の支援（麒麟絆プロジェクト）への誘導支援も行った。

（４）花き周年栽培への取り組み

県農業総合センターでは、平成２５年度より、「食料生産地域再生のための先端技術展開事業」の１課題として、トルコギキョウと低温開花性花き（カンパニュラ）の組み合わせによる効率的周年栽培技術の確立の実証試験を南相馬市で行っている。そこで、県農業総合センターと連携し、実証試験の成果の普及推進とカンパニュラ栽培の技術指導を行い、トルコギキョウと組み合わせた花き周年栽培体系の構築を支援している。

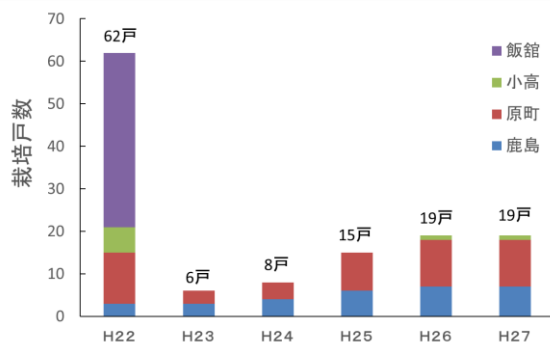
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
トルコギキョウ 8月出荷		○		◎								
カンパニュラ 2月出荷									○	◎		



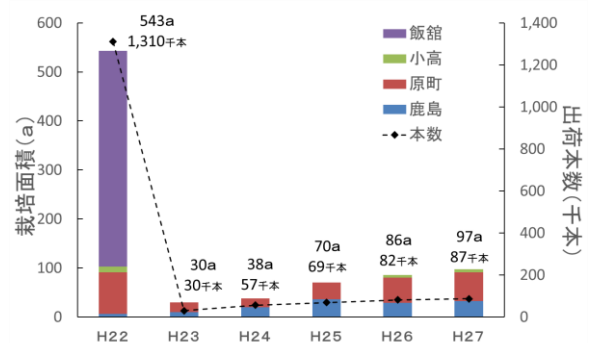
トルコギキョウとカンパニュラの栽培体系

３．具体的な成果（詳細）

これらの活動により、南相馬市で栽培戸数が着実に増加し、平成２３年度には栽培戸数６戸、栽培面積３０a、出荷本数３０千本だったところ、平成２７年度には栽培戸数１９戸、栽培面積９７a、出荷本数８７千本まで拡大した。



トルコギキョウ栽培戸数



トルコギキョウ栽培面積と
出荷本数

平成２７年５月には、南相馬市の生産者１９戸でＪＡそうまトルコギキョウ生産部会が新たに設立された。９月には、麒麟絆プロジェクトの支援を受け「咲かそうそうま。トルコギキョウ魅力アッププロジェクト」を立ち上

げ、産地力強化に向け、部会での品種展示会研修や市場訪問等の組織活動を展開している。

また、トルコギキョウ栽培と組み合わせたカンパニュラ栽培の導入戸数も、平成25年度の実証農家1戸から、平成27年度には5戸と着実に増加している。

4. 農家等からの評価・コメント

(トルコギキョウ生産部会 部会長 堀千夏子氏)

震災により生産者が激減してしまったが、徐々に花き栽培に取り組む方が増え、平成27年5月には新たに部会を設立することができた。また、電照によるカンパニュラ栽培にも取り組んでおり、夏秋期にトルコギキョウ、冬春期にカンパニュラと周年での花き生産を目指していきたい。栽培経験が浅い生産者が多いため、栽培技術の早期習得や出荷量の確保等課題も多いが、花きを通して地域に新しい風を吹き込めるように頑張っていきたい。

5. 普及指導員のコメント

(相双農林事務所農業振興普及部 技師 松崎俊)

施設の有効利用と、経営品目の転換を考えている生産者に対象を絞って新規作付の推進を行った結果、栽培者を着実に増加することができた。また、JAトルコギキョウ生産部会の設立を誘導できたことは、産地復活に向けた大きな一歩であると考えている。さらに、指導会等でカンパニュラの導入を推進することで、徐々にトルコギキョウの後作として導入する生産者が増えている。

震災後に栽培を開始した生産者が多く、技術の定着や生産者間でのバラつきが課題である。今後も、新規栽培者の確保や巡回指導による技術定着支援に取り組み、新たな産地形成を図っていく。

6. 現状・今後の展開等

産地発展のため、新規栽培者の確保に継続して取り組んでいくとともに、JAや部会と協力し、経験の浅い生産者を重点的に技術支援することで、単収の増加と品質向上による販売単価アップを図る。

また、部会内での栽培技術の高位平準化のために、栽培マニュアルの作成や出荷規格の作成・見直しを支援する。併せて、先進地視察研修や市場調査等の誘導を図り、産地ブランド育成のため組織活動を強化する。

さらに、トルコギキョウの後作としてカンパニュラの導入を推進し、花き周年栽培体系を確立することで、農業所得の向上と花き産地の復活と拡大を目指す。